# 文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間　会報 No.93　2021 年 12 月 25 日発行
川崎市幸区古市場 2-109　京浜協同劇団内　TEL 044-511-4951　郵便振替 00250-3-18369
ホームページ：http://www.keihinkyoudougekidan.com/bunkano-nakama/


第 23 回定期総会

## 記念講演で日本の食料問題を学びました

文化の仲間事務局長　**山木　健介**

2021 年 9 月 12 日に第 23 回定期総会を開催しました。総会を開催しなかった年や台風で中止した年もありますが、結成から 25 年目になります。

ここ 1 年間コロナ禍で行事が何も行えない状況でしたが、2022 年 3 月に第 2 回平和憲法作品展を行うとの提案をしましたので、総会での発言はほとんど作品展に関するものでした。総会の発言は以下のとおりです。

「全日本リアリズム演劇会議の関東ブロックの中で、作品展の話をした。募集要項が決まれば呼びかけたい」「作品の出品は、文化の仲間だけではなく、もっと出品者の掘り起こしをやった方が良い」「作品展示だけではなく、音楽演奏などがあっても良いのではないか」などでした。

総会の最後に、「世話人」（役員）を選任しました。（敬称略）

二村柊子・髙橋明義・西川日女子（以上代表）山木健介・須田セツ子・橋本教善（以上事務局）川島雅博、佐藤友吉・常名孝央・藤崎秀子、の 10 名です。

また、長年世話人をやっていただいた小野寺晃さんに顧問をお願いしました。

総会終了後に、総会記念企画として、坂内亮（ばんないあきら）さんに「日本の食料」について講演していただきました。以下は坂内さんのお話を一部紹介するものですが、要約の責任は筆者にあります。

日本の食料自給率は、カロリーベースで 37％（2020 年度）という過去最低の状況になっています。また 2018 年には種子法が廃止され、2020 年には種苗法が改定されました。

種子法は、国や都道府県が品種開発、品質の保証をし、低価格で供給するものでしたが、「民間企業の事業参入を阻害している」として廃止されました。

種苗法は、農作物の品種を開発した人や企業に「育成者権」を認め権利を保護するもの（著作権と同じ）で、農家が種苗として使う自家増殖は「育成者権が及ばない範囲」として原則自由でしたが、「海外流出の防止」を理由として、登録品種の自家増殖を禁止しました。農家は、毎年種を買わなければならなくなって、負担が増えました。その他、遺伝子組み換えや農薬問題、お米の問題など「日本の食料」問題についてお話していただきました。

講演の資料

坂内さんの講演

京浜協同劇団　第 95 回公演

# 「濯ぎ川」「高瀬舟」の名作二本立て公演

新型コロナ「緊急事態宣言」が解除されたとはいえ、まだまだ警戒を怠ることができない状況ですが、第 95 回公演が 11 月 20 日～ 28 日に開催されました。出演者や観客の方に感想をいただきました。

## 役作りって何ぞ？

小山　貴司

破壊と再生。破壊と創造。破壊と…。

よく聞くフレーズだと思う。物事を作るにはまず破壊をしなければならない。余計な物事は入れ込むな、ということだろうか。余計なものとは何だろうか。例えば料理の隠し味だったり、絵画で色を重ね塗りするときだったり。一見すると、その行為をすることによって、より美味しくなったり、より美しくなったりするもののような気がする。しかし、とても食べられたものじゃなくなったり、今まで美しかった景色が一転して見るに堪えないものになったりする。足す、という行為は今まであったものではなくなるということだ。良くならないこともあるかもしれないが、しかし現状に満足していないのであれば、創作者は常に「足す」ことをしなくてはならない（芝居においてはこの 2 つと違い引くこともできるが）。

では、演劇における余計なもの。そして、足す、という行為は一体何だろう。そもそも演技とは。演じるとは。

僕の中でその答えは都度変化している。僕たちは日常生活でも、人によって口調や態度が変わることがある。それは親と話すとき、上司や先生、友達と話すときが違うように。演技とは、その役がそのときに、その態度や言動をとらざるを得ないことを、自分の持っている感覚で表現すること。最近はそんな風に感じている。

写真撮影©長坂クニヒロ　以下同

では今回「高瀬舟」ではどうだろう。

弟殺しで遠島の刑を受けた罪人・喜助を船で護送する役目を担った同心・羽田庄兵衛は、喜助の様子の罪人らしからぬ明るい様子を不思議に思った。興味を持って話しかけた庄兵衛に喜助が物語ったその話の内容に、庄兵衛は納得すると共に感心の念さえ覚えてしまう。さらにその犯した罪について話した喜助の身の上は、庄兵衛の心に捉えどころのない、そしてやり場のない思いと疑問を生じさせるものだった。

これが高瀬舟のあらすじ。知っている方も多いと思う。僕が演じたのは、この弟殺しをした罪人、喜助だ。読んでみると、さぞ弟想いで素朴な青年という印象を受けると思う。実際僕も始めはそうだった。世俗から離れた達観した青年。そんなイメージ。演じていても違和感は感じない。しかし、これは演出のある一言で一変した。「喜助が弟をわざと殺していたとしたら？」先も言った通り、喜助の身の上を考えると不憫でならない、と読者は判断すると思うんですが、ここでこう解釈したらどうなる？と、演出の護柔さんから言われたのだ。

この問いかけ。これだけで僕の芝居はガラリと変わりました。それがすっごい面白かったんですよね。真逆じゃないですか。弟を思っている純な喜助。対して護柔さんが提案してきたのは自分の利益のために弟を殺した（刑務所に入ると飯も食えるし 200 文もらえる）。このね、役に負荷をかける発見をしたときに役

者はとんでもない喜びを覚えるんだなぁと初めて思いました。これが役作りなんだろうなぁと。このキーワードを探すために、稽古で様々なことを試していくんですよね。セリフで書いてあることは、真実ではないんですよね。だって、僕らも普通に嘘つくじゃないですか。喜助だって嘘ついてるかもしれませんよね。嘘をついていないのはト書き。つまり、行動だけなんです。行動だけが真実。それだけを信じて積み上げていく。そこから構築していく。喜助の場合は弟を殺したということと船に乗せられて遠島になるということ。他はわからない。だから、このキーワードはとても衝撃的で、実際に試してみたらとても楽しかった。周りの景色が変わった。気にするポイントが変わるんですよね。庄兵衛はどういう感じでこっちを見ているのかとか。うまくだましてやろうとか。そんなこと思いもしなかったのに、アンテナが張られた。変化するって楽しい。もちろん、新しいことをするのは怖いけど、こんなに楽しい景色が待っているなら、何回でもチャレンジしたい。改めて今回京浜に参加できてよかったなぁ。

…これ、誰得の記事なんだろうか。(笑)

(協力出演者・多摩区在住)

# 足ることを知らない芝居を期待

石川　房乃

コロナ禍、すっかりヒキコモリ生活が定着していましたが、久しぶりに観劇のため外出。受付の手伝いをし、まず感じたのが、お客さんの楽しそうな顔、顔、顔。あ～やっぱりいいなぁこの感じ…と、私自身もいっそう笑顔でお手伝いができました。

今回は「高瀬舟」と「濯ぎ川」の２本立て。静と動といったところでしょうか。

「濯ぎ川」は、妻と姑、気弱な（？）婿養子の上下関係の逆転劇。狂言仕立ての簡素な舞台でしたが、役者の動作と洗濯している時などの擬音で、空間を想像

することができました。

芝居中、客席のあちらこちらで笑い声が出ていました。ただ、もう少しテンポ（相手役者とのかけあい、自分自身の気持ちや動作の緩急）がよくなれば、もっと笑いの部分が増え、笑い声が大きくなる気がしました。私が観劇したのがちょうど中日。きっと残り２日間は、会場が大きな笑いで包まれたでしょう（その後観劇に行った知人が、濯ぎ川が大変面白かったと言っていました。楽日に向かって花開いたのでしょうね！）。

一方の「高瀬舟」。まずは舞台装置。さすが京浜！

舟の動き出しから、水面をすべるように川を下っていく様子が、装置と照明、そして船頭さんの動きでみごとに表現されていました（この作品に関係なく、あの舞台に満月を浮かべたいと思ってしましました(笑)）。

貧しい生活の中、弟殺しという罪名で遠島の刑に処せられた喜助。なぜ喜助は弟を殺してしまったのか。殺しには違いないが、これが重罪に値するのだろうか。いったい誰のための罪だったのか。事のいきさつを知った庄兵衛の心持ちはいかほどだったのだろうか。喜助の苦しみ、悲しみ、絶望、葛藤、そして喜助にしか知りえない微かな喜び、たくさんの気持ちが入り混じった独白。喜助役の無気力とは違った、力みのない演技が心に残りました。

「高瀬舟」ではいくつものことを考えさせられまし

た。その中でも安楽死（自殺ほう助）と貧困の問題は、現在も論じられるテーマであり、「おりん」に通じる問題提起を感じました。この令和の時代になっても、貧困で苦しんでいる人がたくさんいます。解決するのは難しいのでしょうか。助けを求める人がいて、（本当は）助けられる人（政治家）がいるのに、その人たちは助けてくれない。太陽が西から昇らない限り、道は開かれないのでしょうか。

芝居創りの上では、足ることを知ってはいけないのだろう。今作より次回作、その次、そのまた次。足ることを知らない京浜のお芝居を期待しています。

公演を終えて

# これからは落ち着いて京浜協同劇団に

篠﨑　旗江

何とか無事に公演は終了したと安堵していますが、どうだったでしょうか？

9 月入団のまだ劇団員歴 2 ヶ月余りの私と、創立以来 63 年の団員歴の若菜とき子さんとの W キャスト。私自身が感じるプレッシャーもかなりのものがありましたが、この海のものか山のものかわからない私をキャスティングした演出の護柔さんをはじめとする劇団の方たちの不安は如何許りのものだったかと思うと、只々感謝しかありません。

夏のかわさき演劇まつり『冒険者たち』を観劇した時に、「秋に高瀬舟・濯ぎ川の公演決定」の折り込みチラシを見、そこに子どもの頃家族ぐるみのお付き合いのあった飯沢匡の名を。それにすごく嬉しくなり「絶対に観に行きます！」の強い感情で、受付にいらした和田さんに声をかけたのが、今の私の切掛。

それから 8 月下旬に和田さん宅で四方山話を。夕方帰ろうとする私に「その日の夜に秋の公演に向けての初顔合わせがあるので、ちょっと覗いていかない」なんて声かけられて、根っからの野次馬根性で好奇心旺盛の私は、恐々しながら顔を出して、そのまま入り込んでしまったという訳である。

本読み立ち稽古と進んでいく中で、いままで私が関わってきた公演の座組とはいろいろ違いがでてくる。演出家の声かけで、公演ごとに役者などが集められる場合が多く、その都度、その演出家のやり方に添った

舞台創りを全員でやってきた。ところが全員同じ劇団員で立場も同じだと、皆がそれぞれ意見や思い入れを出し合い、演出家が何人もいるようになってくる。びっくりしたのは最初の立ち稽古の時に、ほぼ全員がプロンプターになっていたこと。一人ひとりが全員でより良い舞台を創り上げようとする力が、余計に強いのかもしれないと感じた。

チケットの個別売り上げ目標、到達具合の中間発表、日ごとの集客数の棒グラフの掲示など、様々なめんでカルチャーショック。パズルのように組み合わせを考え造り上げる客席や楽屋づくりも初めての経験。その体験一つひとつが面白く勉強になった。

そして何よりも嬉しく大切なのは、たくさんの人との出会いである。劇団員は勿論のこと、公開稽古（これも初体験）をわざわざ観に来てくださり意見を言ってくださる方々、公演を四方八方から支えてくださる仲間の方々。他では絶対にない心底温かい、通じ合う大切な人との出会いである。

この年齢になってくると、なかなか新しい人と知り

合う機会がないことではある。たが幸い私は、いろいろの座組で舞台を創り上げてきた中で、少しふれあう機会ももてた。そんなふれあいはお互い様の仲になり、双方の舞台の観劇に繋がり、触発、発見、勉強そして成長になる。今回もお陰様でお互い様の方々が何人も来てくれた。有難いことだと思う。

今までの私は流浪の民のごとく、声かけていただくところに出演していたが、これからは落ち着いて京浜協同劇団に居させていただき、たまに旅できればと思っている。

これから、よろしくお願いいたします。

（劇団員）

# 「高瀬舟」を観て

大谷　敏行

テーマは謂わば「安楽死」「知足・足るを知る」と言われていますが、今は安楽死にフォーカスして考えてみましょう。

何年か前に著名なインテリが躰が不自由になり、多摩川で入水自殺をしようとして自身では果たせず、2人の友人の手を借りて自殺を遂げ、事件が話題になりました。友人 2 人の後日談は知りませんが、自殺幇助で嘱託殺人・自殺関与罪で起訴されたんでしょう。

日本で安楽死が認められていればこういう悲劇は起こらないはずですが。高瀬舟の喜助も現代であれば殺人罪ではなく、嘱託殺人・自殺関与罪ということでしょう。

昨年でしたか、脚本家の故橋田壽賀子さんが安楽死を肯定して物議を醸しました。

いずれにしてもセンシティブな問題で、安楽死が法制化されることを願うばかりです。

話しを高瀬舟の戻します。

パンフレットに掲載されている棚沢さんの「下剋上

について」に疑義を呈したいと思います。

「どんな惨めな境遇さえも従順に受け入れ満足する喜助の卑屈さをつかまえて、『知足』などと持ち上げ感心してみせる。底辺にあえぐ貧者を出汁にして、自分の境遇に満足し、ありがたがってみせる。なんという鼻持ちならない小市民的傲慢さ、奴隷根性であろうか。『貧者は足るを知れ』『小市民は下を見て暮らせ』。そんな浅ましい教訓を、……垂れ流す」。引用が長くなりましたが、私はこれを読んで唖然とした。何とした曲解・歪曲であろうか？（どんな論も自由ですが）。そもそも「知足・足るを知る」とは老子が唱えたと言われる箴言で、普遍的な価値観で、貧者、富者を問わないことは論を俟たないと思うのだが、どうであろうか？

末尾になりましたが、舞台の出来映えは「濯ぎ川」も「高瀬舟」も出色の出来だったのではないでしょうか。

（劇団員）

# 表現を楽しむ

油上　恵子

『濯ぎ川』と『高瀬舟』の二本立て公演、私が観劇したのは最終日の 15：00 からの、最後の回だったが、客席はなかなかの盛況だった。チラシには限定 40 席って書いてあったけどなあと思いつつ、ざっと観客を数

えると 60 人以上はいた。最後の回なので、ほかの回にまわってもらうこともできないなど事情はあったと思うが、チラシに書いたらそれは公約みたいなものなので、守ってもらいたいものである。

さて、私は狂言の表現が好きだ。三角にぐるっとまわればもう目的地に着いてしまうし、「川に着いた」と宣言すればそこは川。どこか子どものごっこ遊びに通じるような、芝居の根源て、こういうところにあるのではないか、と思うような楽しさがある。擬音を役者が自分で言ってしまうのも愉快だ。どこだどこだと人を探すときも、相手は遮るものもない同じ舞台にいるのだが、見えてない設定だ。演じる側も観る側も、これはお芝居ですよと分かっているお約束の上で、ヌケヌケと演じる。そのカラッとした遊び心の世界が好きなのだと思う。

そういう訳で『濯ぎ川』は結構楽しませてもらった。女房や姑がやいやい言って急かすのに対して婿が「じゃぶじゃぶじゃぶ」と洗濯するあたりはいい掛け合い（？）で、とくに楽しかったシーンだ。私の好みからすれば、ラストは逃げる婿を女房が追いかけて去るところでスパッと終わってほしかった。残った姑が書き付けをわりとゆっくり破って客席に投げるのはどうも意味ありげで狂言らしくない気がする。

『高瀬舟』の方は、白状すると、そもそも話が苦手だ。なので申し訳ないが話の内容に関しては書きたいことがない。川と舟のセットが現れる。川岸に舟に降りる階段のようなものが掛かっている。これはきっと、舟が動くのを表現するために、舟が進むのと反対方向に動くに違いないぞ。と思って観ていると、果たして舟が下手向きに出発するのに応じて階段は上手へ向かって動いて袖に消えていってくれた。よしよし、期待通り。私が内心ニンマリしていると、後ろの席から、フフっと笑いを漏らす声が聞こえた。その人も同じ予想をしていたのか、あるいはシリアスな話なのにちょっとギャグっぽく見えてしまったのか。むずかしいところだが、私は舞台のそういう工夫が好きなのだ。その後も私は、おや、舟の向きが斜めになったぞ？とか、そんなところを観察していた。およそ『高瀬舟』の感想らしくはないが、作品の内容が苦手でも、そんな鑑

賞方法もあるということである。

正統派の見方じゃなかったかもしれないけれど、やっぱり演劇は好きだな、などと思い、コロナで引きこもって鬱々としていたのがちょっと元気になり、やや足取りも軽く（この原稿という宿題をもらってしまったのだけが心重く）、帰路についたのであった。

カーテンコール（ダブルキャスト A）

カーテンコール（ダブルキャスト B）

連載　「京浜協同劇団」と私――第 14 回（最終回）

# 音楽人生のはじまり

岡田　京子

私が初めて「作曲」というものをやりたいと思ったのは 18 歳の時でした。当時私は、声楽家の関鑑子（あきこ）氏がおられた東京中央合唱団の研修生で、とにかくみんなで歌うということが大好きという毎日を過ごしていました。

そんなある日、関先生から、前進座という劇団が、今制作中の映画「箱根風雲録」の主題歌の作曲を募集しているから研修生も応募してみたら……というお話があったのです。

それは、水不足で苦しむ農民のために、箱根用水を開通させる話なのでした。いろんな理屈でそれに反対する人々と、農民の側に立って闘う友野与衛門という武士の話でした。歌詞は

〽おいらの恋は　たがねの熱だ　ソレサ
　打てよ響けよ芦ノ湖深く　エイヤのヤットコサ
　おいらの村に水が来る　ソレ水が来る

というような言葉に始まって

〽雨にも雪にも槌音高く
　掘れよ掘り抜け力の限り
〽廻る水車の米つき歌に
　今日も夢見る　豊年祭り
〽開け水門海尻越えて
　あげろノロシを　おいらの涙

というようないきいきした言葉に満ちていて、私にもよくわかり感動できるものでした。そしてフシもどんどん出てきて、それを苦心惨たんしながら楽譜にして提出し、合唱団の応募の一つとして劇団に送られ、すぐさま採用が決定され驚いたのです。結局、最終的には、ハメてみると曲が若すぎる、ということになり、この音楽を担当された大木正夫氏の作曲となりましたが、合唱団の友人たちはみんな興奮していて、とにかく私を先生につけて、作曲の道を歩かせようとしてくれたのでした。ありがたいことであったのです。

そして私は最初の師、原太郎氏の弟子になって、幾日もたたないうちに、私は師匠について秋田の「わらび座」に行くことになります。

「作曲家はその国の民謡を知っていなければならない。外国の音楽のマネばかりしていているようでは作曲家とは言えない」と言われてのことでした。私は日本の現在に伝えられている民謡をほとんど知りませんでした。こうして私の音楽人生は始まったのでした。

**世話人会から**

1949 年に音楽人生を始めた岡田京子さんの作品には劇音楽もたくさんあります。京浜協同劇団の公演にも参加してくださいました。主なものとしては、

1985 年　持つということ（ハンガリーの作家・ユリウス・ハイ）
1986 年　ターミナル（木村快）
　　さんねん峠（台本・木村快）
1989 年　出航（木村快）
1998 年　鉄道員（ぽっぽや）（原作・浅田次郎）

連載 14 回、毎回愛読させていただきました。ありがとうございました。――岡田さんのアコでまた歌える日を待っています。

2021 年 12 月　二村柊子

**本の紹介**

## 戦争と弾圧――三・一五事件と特高課長・纐纈弥三の軌跡

**纐纈 厚 著　　新日本出版社　2200 円＋税**

纐纈弥三という人物をご存知でしょうか。戦前、1928（昭和 3）年に、三・一五事件という共産党弾圧事件で陣頭指揮をとった特高課長でした。その後、文部官僚として社会教育局長となり、戦後は国会議員として「建国記念の日」制定に奔走しました。出身が同郷の歴史学者の筆者が、その生涯を克明に追うことで戦前戦後を通観します。

劇団員による劇団員紹介　第 12 回――藤井康雄さんによる宮原喜美子さん紹介

# これぞまさに京浜協同劇団員だ！

京浜協同劇団　**藤井　康夫**

「イヤ、申し申し、これの、これの男めは何処にござるぞ！」「あるものか、ヤイ！　あるものか、ヤイ！」。先の公演「濯ぎ川」は宮原さんの久方ぶりの舞台、好評のうちに幕を閉じました。

「宮原さんってどんな人？」それに対して私も率直な感想を述べさせていただきますと……。劇団員の集まるあちこちの場面において「あ！　宮原さんがいる」と思わせる賑やかな音声が充満する事。その天真爛漫な童心に満ちたというか、感じたことを率直に受け答えするというか、裏も表も全くない率直さ加減というか、私もああなりたいなーと思わせる一人であります。

宮原さんの経歴はわが協同劇団の面々と比べてもかなり特異なものが有ります。生まれは金沢だが育ったのは九州の確か福岡、幼少のころから母親の影響もあってか日本舞踊の稽古に通う日々、物心ついたころには両親は離婚、自立せざるを得なかったのか、はたまた表現者としての道を目指したかったか？　多分その両方の想いから上京し前進座の養成所に入門する。卒業に当たっては座員への採用枠から外れしばらくの浪人生活の後今度は「劇団風の子」に入団することになる。

以降、風の子での活躍ぶりは目覚ましく多くの作品での主要な役を務めながら全国での公演を続ける生活をしてきたという。

つまり、宮原さんは専門者への道を目指しその願いを果たしながらその道を退き京浜協同劇団に落ち着いているという唯一の劇団員なのです。何故そうなったのか、そのへんの事情は気になるところです。

実は宮原さんの住まいは麻生区、私の住まいは多摩区、稽古の帰りは私の車で登戸駅までご一緒する事になります。あまり多くを語りませんでしたが「風の子で、今は亡きご結婚の相手に巡り合った事」「娘二人の出産が有って子育てが大変だったこと」「美容院をやっていた母親の援助に迫られたこと」等があったなど話していただきました。

私の記憶によれば宮原さんとの出会いは 1990 年上演の「麦の穂のように」だったと思う。これは中沢啓治原作の「はだしのげん」に題材をとり、100 人に及ぶ「麦の穂合唱団」を広く公募し県下縦断公演を果たした、劇団にとっても画期的な公演となったものです。宮原さんは小学生の娘さんを連れての参加だったと思います。

表現者、女優としての夢を捨てきれず働きながら芝居が出来る協同劇団に参加、その一方で日本舞踊への精進も怠りなく「難しいのよね、形もさることながら心なの、こ、こ、ろ」「いつも叱られてばかり」と稽古に怠りなく励んでいる。

表現者としての想いや夢はお孫さんにも及び託しているようだ。本年の演劇まつり「冒険者たち」にはお孫さんを引率しての参加、その姿、生き方は「これぞまさに京浜協同劇団員だ！」の想いを強くするものであります。

初めて京浜協同劇団の創作劇を上演へ

# 市民劇「お～い！煙突男（ミスター・チムニー）よ―天空百三十尺の風―」

制作　**城谷　護**

川崎郷土・市民劇は15年の歴史がありますが、今度、初めて京浜協同劇団が生み出した和田庸子の作品が採りあげられ、来年5月に上演される運びとなりました。

2年に1度の上演で、これまで上演された7本の作品はすべて青少年演劇作家、小川信夫さん（多摩区在住）の作品で、毎回3千人から4千人もの観客を集め好評を博してきました。実行委員会は、小川さんを継ぐ若い書き手を育成する必要があるということで、今回から作品を一般公募しました。応募された作品の中から和田庸子の作品が採用され、東京芸術座の杉本孝司さんの演出で上演される運びとなったものです。杉本さんは7年前に上演した「大いなる家族―戦後川崎ものがたり―」の演出で手腕を発揮してくれた演出家です。

**22回も上演された話題作**

この作品は元々「ミスター・チムニー！天空百三十尺の男」というタイトルで、京浜協同劇団が15年前の2006年にスペース京浜（劇団の稽古場）と横浜の本多劇場で初演、大きな反響を呼び、その後、再びスペース京浜、東京のシアターX（カイ）、茅ヶ崎市の市民文化会館で再演、通算22ステージも上演された話題作です。

**全国にとどろいた「川崎の煙突男」**

煙突男事件は、90年前の昭和5年に川崎で起きた事件です。今の競馬場の所に富士瓦斯（ガス）紡績という会社があり、3千人の女工さんたちが働いていました。中でも沖縄から働きに出て来た人たちが多かったそうです。作業場の環境が悪いだけでなく、長時間労働で肺結核などに苦しむ女工さんも少なくなかったとのことです。労働組合は首切り反対、賃金引上げを求めて立ち上がりますが、3か月たっても会社側は応じません。その時、突然百三十尺（約40ｍ）もある工場の煙突に1人の男が登ったのです。男は「会社は要求に応じろ」「女工さんたちよ、ストライキに立ち上がろう！」と叫んだりビラをまいたりして激励しました。

煙突の下では見物人が押しかけ大賑わい。おでん屋、焼き鳥屋などの屋台まで出てまるでお祭り騒ぎ。当時、川崎の人口は10万人でしたが、近県の人も含めて1万人の人が集まったそうです。国内の新聞はおろか海外の新聞まで「ミスター・チムニー（煙突男）」と呼んで報道しました。アメリカのウオール街で始まった世界的恐慌の中で、鬱積していた民衆は、煙突男の奇想天外な“快挙”に拍手喝采したのでしょう。

**今日につながる問題**

ところが、6日目に、天皇のお召列車が近くを通ることになり、煙突の上から見下ろすことは許されないとして、会社側も一定の譲歩をして争議が解決、男は煙突から降りてきたのでした。

この作品が初演された2006年（平成18年）の頃は、非正規雇用という悪い労働形態が始まった頃でした。あれから15年、今も非正規雇用は改善されていません。むしろ深刻化していると言えるかもしれません。それだけにこの作品の上演は、いま頑張っている働く人々へのエールになるに違いないと思います。

出演者を一般公募したところ、40余人もの応募者がありました。稽古はいつものように京浜協同劇団の稽古場で行われます。藤嶋とみ子さんを委員長とする上演実行委員会もフル稼働です。

みなさん、どうか応援してください。

**2022年 第8回川崎郷土・市民劇**　（実行委員長　藤嶋とみ子）

**昭和のはじめ、世界で報道された川崎の煙突男事件**

# おーい！煙突男（ミスター・チムニー）よ

**―天空百三十尺の風―**

**和田庸子/作・杉本孝司/演出・城谷護/制作**

**5月　7日(土)昼　　8日(日)昼　多摩市民館**

**5月14日(土)昼夜 15日(日)昼　サンピアンかわさき**（労働会館）

連絡先　市文化財団 ☎044－272－7366

## ◎文化の仲間通信◎

**◆東京国立博物館　ユネスコ無形文化遺産特別展**
**体感！ 日本の伝統芸能―歌舞伎・文楽・能楽・雅楽・組踊の世界**

日程　2022 年 1 月 7 日（金）～ 3 月 13 日（日）
　　9 時 30 分～ 17 時 00 分（月曜日休館）
会場　東京国立博物館 表慶館
料金　一般 1,500 円／大学生 1,000 円／高校生 600 円
　事前予約（日時指定券）推奨

ユネスコ無形文化遺産一覧に登録された日本の伝統芸能（歌舞伎、文楽、能楽、雅楽、組踊）を一堂に集め、それぞれの芸能が持つ固有の美とそれを支える「わざ」を紹介します。

問合せ・申込み　050-5541-8600（ハローダイヤル）
　公式 HP：https://tsumugu.yomiuri.co.jp/dentou2022/

**◆劇団民藝＋てがみ座公演　レストラン「ドイツ亭」**

日程　2022 年 2 月 3 日（木）～ 12 日（土）（詳細問合せ）
会場　紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA
原作　アネッテ・ヘス／脚本　長田育恵／演出　丹野郁弓／出演　日色ともゑ・別府康子・加來梨夏子・石村みか ほか
入場料金（全席指定・税込み）　一般 6,600 円
　夜チケット 4,400 円（2 月 3 日、8 日）
　U30（30 歳以下）3,300 円（劇団のみ取り扱い・要証明書）／高校生以下 1,100 円（劇団のみ取り扱い・要証明書）

1963 年のホロコースト裁判を舞台に人間の弱さと哀しみそして未来へ託される希望を描く

問合せ・申込み　劇団民藝
　TEL：044-987-7711（月～土：10 時～ 18 時）
　HP: https://www.gekidanmingei.co.jp/

**◆第 11 回　原発ゼロへのカウントダウン in かわさき**

日程　3 月 13 日（日）
　　11:00 開場　13:00 メイン集会予定
会場　中原平和公園
○市民団体のブース・模擬店／音楽・文化行事
○講演　河合弘之（弁護士・映画監督）／青木美希（ジャーナリスト）
○市民団体リレートーク
○デモ行進

3 年ぶりに集会を中原平和公園で開催します。福島原発事故は終わっていません（新型コロナの状況によってはオンライン集会に切り替わる可能性があります）。

問合せ　実行委員会　三嶋健共同代表・川崎合同法律事務所　044-211-0121
　事務局長・かもした元　kibounotubasa@gmail.com

**◆青年劇場　小劇場企画 No.26　「裸の町」**

日程　3 月 4 日（金）～ 15 日（火）（詳細問合せ）
会場　青年劇場スタジオ結（YUI）
作　真船豊／演出　板倉哲／出演　岡山豊明・八代名菜子・星野勇二・山田秀人・藤代梓・松田光寿
料金　一般［前売り］4,500 円［当日］4,800 円／ U30（30 歳以下）［前売り］3,000 円［当日］3,300 円／中高生シート 1,000 円（各ステージ限定 5 席・前売りのみ）

昭和初期、金貸しに丸め込まれる庶民の悲喜を丹念に描いた真船豊の傑作。

問合せ・申込み　青年劇場　TEL03-3352-6922
　E-mail: info@seinengekijo.co.jp
　HP: https://www.seinengekijo.co.jp/

**◆東京芸術座＋シアター Xカイ提携公演**
**東京芸術座公演 No.106　さまようヒロの声―14 歳といじめとオジサン**

日程　3 月 19 日（土）～ 23 日（水）（詳細問合せ）
会場　東京・両国シアター Xカイ
作・演出　宋英徳／出演　山村勇人・梁瀬龍洋・鈴木健一朗・松並俊祐・森路敏・中新井美穂　ほか
料金　一般 5,000 円／ U30 3,500 円／障がい者 3,500 円／高校生以下 2,500 円／夜割 4,000 円
問合せ・申込み　東京芸術座　TEL03-3997-4341
　HP: http://www.tokyogeijutuza.co.jp/

絵手紙　竹間テル子

**■文化の仲間ギャラリー■**　　大谷　敏行⑯

**「厳選」大谷敏行の川柳塾**

日大に　タックルする者手を挙げろ
　二〇二一年一一月九日『朝日新聞』掲載

継ぎ当てた　古着に母の深い愛
　二〇二一年一〇月一四日『日本海新聞』掲載

四面楚歌　為すすべもなく貝になり
　二〇二一年九月三〇日『日本海新聞』掲載

痛ましい　難民という棄民の群れ

学舎（まなびや）や　天網恢々伏魔殿

秋深し　暮らしをひさぐ原油高

下駄の雪　公明嚆矢と胸を張る